

著者・翻訳者プロフィール

◎著者

鄭 昞旭 (チョン ビョンウク, 정병욱)

高麗大学校民族文化研究院・HK 教授 (副教授)。韓国近代史専攻。主な論著に『植民地不穩列伝 (식민지 불온열전)』(2013)、『日本の朝鮮植民地支配と植民地的近代』(共著, 2012)、「朝鮮殖産銀行員、植民地に生きる (조선식산은행원, 식민지를 살다)」(2007)、『韓国近代金融研究 (한국근대금융연구)』(2004) 等がある。

板垣 竜太 (いたがき りゅうた)

同志社大学社会学部・准教授、同志社コリア研究センター事務局長。朝鮮近現代社会史、文化人類学。主著に『朝鮮近代の歴史民族誌』(2008)、共編著に『東アジアの記憶の場』(2011)、『日韓 新たな始まりのための20章』(2007) 等がある。

西川 祐子 (にしかわ ゆうこ)

元京都文教大学人間学部教授。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。大学博士 (パリ大学)。『日記をつづるということ』(2009) のほかに、『私語り 樋口一葉』(2011)、『住まいと家族をめぐる物語』(2004)、『近代国家と家族モデル』(2000)、『借家と持家の文学史』(1998年) などの著書がある。

クラウディア・ウルブリヒ (Claudia Ulbrich)

哲学博士、ベルリン自由大学近世史およびジェンダー史教授。ドイツ研究振興協会 (DFG) の研究グループ「比較文化的視点から見た自己証言文」(2004-2012) 代表。「近代における自己証言文」シリーズを共編で刊行。主な研究としては、自己証言文、ジェンダー研究、キリスト教 - ユダヤ教関係史、農村社会史などがある。学術雑誌『エゴドキュメントと歴史 (Egodocuments and History)』編集委員。

金 何羅 (キム ハラ, 김하라)

ソウル大学校奎章閣韓国学研究院・専任研究員。ソウル大学校歴史教育科と国語国文科を卒業後、同大学にて韓国漢文学を専攻し、博士号取得。主な論文に「一周辺部士大夫の自意識と自己規定 (한 주변부 사대부의 자의식과 자기규정)」(2012)、「通園 俞晩柱のハングル使用に関する一考察 (通園 俞晩柱의 한글 사용에 관한 일고)」(2012)、「俞晩柱の『欽英』研究 (俞晩柱의 『欽英』 연구)」(2011)、「洛下生李學達書簡文の自己叙事的特性 (洛下生 李學達 서간문의 자기서사적 특성)」(2004) 等がある。日記をはじめとする self-narrative の散文に関心がある。

イザベル・リヒター (Isabel Richter)

歴史学者。現在はゲッティンゲン大学近代史代理教授 (Vertretungsprofessorin)。博士論文では日常史およびジェンダー史的観点からみたナチズムに対する政治的抵抗について、教授資格論文では歴史人類学および19世紀における死の文化史について研究した。主たる研究領域は、近代西欧における死の文化史、ナチズム史、物質文化およびビジュアル文化、自己証言文、ジェンダー研究、1960年代および70年代西欧における青年文化。

山本 浄邦 (やまもと じょうほう)

韓国学中央研究院フェロー、佛敎大学大学院文学研究科・博士後期課程。専門分野は、韓国近現代史、近現代東北アジア文化交流史。共編著に『国家と追悼』(2010)、『韓流 日流：東アジア文化交流の時代』(近刊)、共著に『大谷光瑞とアジア』(2010) 等がある。

松田 利彦 (まつだ としひこ)

国際日本文化研究センター研究部・教授。京都大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得修了。主に警察機構、植民地官僚、参政権問題等を通じて、植民地朝鮮の支配政策史を研究している。主著に『日本の朝鮮植民地支配と警察』(2009)、『日帝時期参政権問題と朝鮮人 (일제시기 참정권문제와 조선인)』(2004)、共著に『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』(2009)、『地域社会から見る帝国日本と植民地』(2013) 等がある。

李 炯植 (イ ヒョンシク, 이형식)

高麗大学校亜細亜文化研究所・HK教授(助教授)。高麗大学校卒業後、東京大学日本史学科研究室にて博士学位取得。主著『朝鮮総督府官僚の統治構想』(2013)の他に、多数の論文がある。

權 ボドゥレ (クオン ボドゥレ, 권보드레)

高麗大学校国語国文学科・副教授。著書に『韓国近代小説の起源 (한국 근대소설의 기원)』(2000),『恋愛の時代 (연애의 시대)』(2003, 日本語版: 勉誠社, 2012年),『1910年代、風聞の時代を読む (1910년대, 풍문의 시대를 읽다)』(2008),『1960年を問う (1960년을 묻다)』(共著, 2012)等がある。韓国近代文学研究からはじまり、現在は3・1運動の文化史に焦点をあて研究中である。

太田 修 (おおた おさむ)

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科・教授、同志社コリア研究センター・センター長。朝鮮現代史、近現代日朝関係史専攻。主な著書に『日韓交渉』(2003)、『朝鮮近現代史を歩く』(2009)、共著に『植民地朝鮮の日常を問う』(2012)、『未完の解放 (미완의 해방)』、『朝鮮の歴史』(2008)などがある。

金 武勇 (キム ムヨン, 김무용)

高麗大学校韓国史研究所・研究教授。韓国現代史を専攻し、2005年、高麗大学校史学科にて博士学位取得。現在の関心分野は、韓国の過去の清算と民間人虐殺問題である。関連論文として、「過去清算作業における真実を語ることと対抗ナラティブ主体の形成 (과거청산 작업에서 진실말하기와 대항 내러티브 주체의 형성)」(2011)、「政府樹立前後時期における国民形成の同種化と政治虐殺の言説発展 (정부수립 전후시기 국민형성의 동종화와 정치학살의 담론발전)」(2010)、「「済州4.3討伐」作戦の民間人犠牲化戦略と大量虐殺 (제주 4.3 토벌 작전의 민간인 희생화 전략과 대량학살)」(2008)などがある。

◎翻訳者

服部 いつみ（はっとり いつみ）

翻訳家。上智大学文学部ドイツ文学科卒業。訳書に、ドロテー・ヘンティエス作／フィリップ・ヴェヒター絵『みんなペンギン』（セーラー出版）、エヴェリン・ハスラー作／レナーテ・ゼーリッヒ絵『森の大きな女の子』（セーラー出版）、マルティン・ディンゲス「ドイツのホメオパシー患者向け雑誌に見るジェンダー化した健康相談」（『「マニュアル」の社会史』所収）など。

吉川 絢子（よしかわ あやこ）

同志社コリア研究センター・嘱託研究員。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。専門分野は韓国近現代法制史。主な論著に「植民地朝鮮における離婚訴訟と朝鮮民事令」、「日帝時期 離婚訴訟과 日本人 判事」、「近代初期韓国の民法学受容と判事に対する影響（근대초기 한국의 민법학 수용과 판사에 대한 영향）」、「1920～1941年京城発行『法政新聞』（1920년～1941년 경성 발행『법정신문』）」等がある。

榎谷 祐一（ますたに ゆういち）

富山大学人文学部（朝鮮言語文化コース）を経て高麗大学校大学院韓国史学科に進学。現在、同大学同学科博士課程に在籍。韓国近代史専攻。